

石川 真由美 編

『世界大学ランキングと知の序列化』

— 大学評価と国際競争を問う —』

米澤 彰 純

1990年代末に香港の雑誌『アジアウィーク』がアジア大学ランキングを発表したとき、東京大学は蓮見重彦総長のもとで不参加を公式表明し、東北大学が1位となったことは、世界大学ランキングの手法・社会的受容を論じた名著小林哲夫『ニッポンの大学』講談社現代新書(2007)の冒頭に出てくるエピソードである。現在、日本のトップ大学が世界やアジアの大学ランキングで順位を落とし、社会的な批判を浴びながら苦闘する姿が話題となっている。このようななか、世界大学ランキングや大学の国際的な評価のあり方について正面から切り込んだ、長く待たれた本格的著作が登場した。

本書は、編者である石川が序章とあとがきを執筆、以下、国内外の気鋭の著者たちにより国際的な大学ランキングや評価の最新の手法、そして社会での受け止め方のもつ課題を鋭く描き出している。著者はそれぞれ個性が強いが、あえて目次の順序を無視して整理すれば、以下のようにグループ分けできる。

第一は、国際的な実践を幅広く踏まえながらも、世界を俯瞰する議論を行おうとする著者たちである。知識経済と大学に関する欧州プロジェクトを主導するスーザン・ライトは大学ランキングの解釈

や社会的影響に関する主要な議論を紹介しながら現代の学生にとっての教訓を最後に論じている(1章)。また、国際機関や学術界と深く関わりを持つデイヴィッド・ポストは、大学のワールドクラスをめざす動きや議論を批判的に検討し、個々の教員の学術活動の自律性の喪失につながる可能性を指摘している(5章)。

第二は、学術研究者の立場から、日本と世界との関わりを論じる著者たちである。物理学者として科学とあり方を長年論じてきた佐藤文隆は、大学ランキングを題材に戦後から現代にいたる科学・研究と社会との関わりを論じている(2章)。また、国際的に活躍を続ける社会学者荻谷剛彦は、日本の国家目標としてのキャッチアップの終焉とその後を半世紀にわたる政策文書の検討をもとに描き出し、日本の現在の「競争」意識とは何かを論じる(3章)。

第三は、高等教育や学術に関わる専門家の立場から論じる著者たちである。まず、豪州で日本研究をリードし英文出版社トランス・パシフィック・プレスを設立した杉本良夫(4章)、京都大学学術出版会を専務理事・編集長としてリードする鈴木哲也(5章)が、学術出版という視点から、日本の学問と世界の学術界との関わりを豊富な経験と知識から論じ

ている。次に、日本の研究評価の研究開発や実践に関わってきた林隆之と土屋俊(11章)は、日本の研究評価実践におけるピアレビューとビブリオメトリックス指標との関連から見える特質について分析し、他方大阪大学において大学ランキングに関する業務を行ってきた藤井翔太は、世界のランキング、研究評価の動向を概観しながら多様なステークホルダーに対して比較可能なデータを提供する方向への展開を論じ、日本の大学・政府の対応を問う(10章)他、ランキングおよび研究の計量評価に関する基礎解説も執筆している。さらに、大阪大学副理事・東アジアセンター長として大学の国際連携を担う大谷順子は、評者が前任の名古屋大学スタッフとしてモンゴルで不覚にもした営業トークを含め、様々なエピソードを織り交ぜながら中国をはじめとする学術新興国とランキングとの関わりを描き出し、これらの国々や大学とどう向き合うのかとの問題提起をしている。

第四は、東アジアの視点から、大学とランキングとの関わりを論じる著者たちである。幅広い国際経験をもつ比較教育学者である香港大学の李軍は、中国・香港・日本のトップ大学関係者へのインタビューから、東アジア独自の大学アイデンティティや社会との関わり的重要性と現在のランキングを意識した英語論文出版への傾倒との矛盾を論じる(9章)。また、台湾を代表する比較教育学者である周祝瑛は、国際論文データベースに収録される英語論文出版への傾倒が社会科

学にも及ぶ台湾の大学界の実像とその問題点を、特に台湾社会との関わりを重視して描き出している(8章)。

さて私はまず序章を読んだのだが、正直に言えば、迫力や凄みは十分に感じながらも、石川のかかなり踏み込んだ、思い切った論調に驚いた。石川の、実務・企画・研究のそれぞれの能力・実績の高さと飾らない人柄はよく存じ上げるところであり、このことは、本書の質の高さに証明されている。たぶん、私が驚いた理由は、評者としてというよりも、一人の研究者としての個人的な事柄なのかもしれないと思いつつ、次に書き連ねることをお許しいただきたい。私自身は、過去15年くらいの大学ランキングの隆盛を、知の序列化というよりも、知の序列の構造変動の過程ととらえてきた。これは、私が多様な新興国での高等教育の隆盛とその「キャッチアップ」のダイナミズムに注目し、これとかかわることに日本の大学の将来展望を見いだそうとしていたからかもしれない。本書にもし加えることができるのであれば、新興国や周辺国に拠点を持つことも多い「ランカー」(ランキング作成者)たちの視点だろうか。データが増え、ルールが可視的になることは、パワーの存在と矛盾が多数者の前にあぶり出されることも意味する。そのあぶり出しの作業のひとつとしても、本書の果たす役割は非常に大きい。

(東北大学インスティテューショナル・リサーチ室 室長・教授/高等教育研究)
[京都大学学術出版会 本体価格3,800円]